

彙報

第一三回総会および研究集会

木簡学会第一三回総会と研究集会は、一九九一年二月七、八日の両日、奈良国立文化財研究所平城宮跡資料館講堂において、会員約一七〇名が参加して開催された。会場には、平城宮跡第二二次調査、飛鳥池遺跡、桑津遺跡、秋田城跡第五四次調査、柳之御所跡、新潟県内の緒立C他七遺跡、長登銅山跡、上高橋高田遺跡出土の木簡等に加えて、出土が発表されたばかりの湯ノ部遺跡の木簡が展示され、関心をよんだ。

◇二月七日(土)(午後一時～五時)

第一三回総会(議長 志水正司氏)

開会の挨拶で狩野久会長は、新委員が選出されたことを契機に、会運営上改善を要する点、特に会員問題に取り組む必要性を提示された。また七月に逝去された田中稔氏への哀悼の意を述べられた。続いて、議長に志水正司氏を選出して議事にはいった。

会務報告(館野和己委員)

今年度は、新入会員二名、退会者一名で、計二九四名となった

こと、会員問題については、研究集会参加者が飽和状態に達し、会のあり方を再検討する必要性に迫られているとの現状認識を示し、今後アンケート等で会員の意見を聞くこと、また会費の長期滞納者の取扱いに関する内規が委員会で決定されたこと、田中稔氏の御遺族より五〇万円の寄付をうけたこと、等の報告があった。

編集報告(栄原永遠男委員)

『木簡研究』第一三号編集担当の栄原委員から、編集経過が説明された後、製作費の高騰・頁数の増加により、会誌代を今号から四三〇〇円に値上げする旨の報告があった。

会計・監査報告(綾村宏委員・笹山晴生監事)

綾村委員から一九九〇年度の会計報告が行なわれた。ひきつづき笹山監事から、会計運営が適正に行なわれていること、監査の際に来年度予算案作成の提言を行なった旨報告があった。提言をうけて綾村委員から、一九九二年度予算案の報告がなされた。

以上の案件が、異義なく承認された。

入会審査の保留について(狩野久会長)

会則第五条について、狩野会長から二年間をめどに新入会員の入会審査を保留したい旨の提案があり、今後については会員の意見を聞いて検討するとして、案件は承認された。

研究集会(司会 鎌田元一氏)

考古資料としての古代木簡

山中 章氏

近年の新潟県内出土木簡と新たな課題 坂井秀弥氏・小林昌二氏

山中氏の報告は、木製品としての木簡の検討により、製作技法と記載者の一致を指摘し、技法と行政組織の関連性を論じたものである。遺跡の性格や保存問題が注目される新潟県内出土木簡の報告は、坂井氏が八幡林・的場・緒立C・発久・曽根遺跡等の概要を説明し、小林氏が八幡林出土木簡を中心に主要な木簡の内容を説明した。両報告の内容は本号に掲載できた。

研究会終了後、ひきつづき同会場にて懇親会が行なわれた。

◇二月八日(日)(午前九時三〇分～午後三時)

研究会(司会 山中敏史氏・石上英一氏)

一九九一年全国出土の木簡

森 公章氏

秋田城外郭東門跡付近出土の木簡

小松正夫氏・平川 南氏

山口県長登銅山跡出土の木簡

池田善文氏・八木 充氏

森氏の報告は、一九九一年に全国で木簡が出土した三七遺跡について、木簡出土遺構と木簡の概要を説明したもので、その多くは本号に掲載できた。

秋田城跡出土木簡については、小松氏が遺跡の概要を、平川氏が木簡の内容を説明した。整理途中の報告であり、未報告分を含めた全容の発表が待たれる。

一九九〇年度長登銅山跡出土木簡の概容は、前号に池田・八木両氏による報告がある。

午後からは、追加報告として湯ノ部遺跡出土木簡について、滋賀県文化財保護協会の大橋信弥氏の説明があった。つづいて二日間の報告に関して質疑討論が活発に行なわれた。最後に早川庄八副会長から会の運営について意見を寄せていただきたい旨の挨拶があり、閉会が告げられた。

委員会報告

◇一九九一年二月七日(土)

於奈良国立文化財研究所

総会に先立って、会務報告、『木簡研究』第一三号編集報告及び頒価について、一九九一年度会計中間報告、一九九二年度予算案、総会・研究会の運営等について検討が行なわれた。また、長期会費滞納者の取扱いに関する内規(案)の検討、会の組織・運営について、主に会員問題に関する討議が交わされた。

◇一九九二年五月二日(金)

於奈良国立文化財研究所

会務に関しては、幹事交替(本郷真紹氏の退任・櫛木謙周氏への委嘱)の報告、会費長期滞納者の内規による退会の報告がなされ、それぞれ承認された。一九九一年度の会計報告、『木簡研究』第一四号の編集計画、第一四回大会の日程・報告内容・研究会の持ち方などについて検討を行なった。

また同日、一九九一年度の会計監査も行なわれた。

◇一九九二年一月六日(金)

於奈良国立文化財研究所

会務について

一九九二年度の会計中間報告について

『木簡研究』第一四号の編集状況について

第一四回総会・研究集会の日程・内容等について

編集後記

一雨ごとに秋は深くなって、もう晩秋。奈良公園では、紅葉やナキンハゼが朱色に染まり始めている。大会まで、余すところ三週間。ようやく再校を印刷所に戻せる段階までこぎ着けた。

本号では、全国四三遺跡から出土した木簡について新しい情報を掲載することが出来た。お忙しいなか、原稿を執筆していただいた方々や、発掘を担当された方々、関係各機関に、厚くお礼を申し上げる次第です。

論文は五篇を収めることが出来た。山中章氏と小林昌二氏の論文は、昨年の大会報告をもとに、新たな視点を加えて執筆していただいたものである。両報告が、研究集会で会員諸氏の活発な論議をよんだことは記憶に新しい。山中論文は詳細な図表を加えた四〇頁余の雄篇である。岩本次郎氏、鈴木景二氏、吉村昌之氏から、論文を御寄稿していただいた。岩本論文は長屋王家木簡を、鈴木論文は二条大路出土の木簡削屑を手がかりに、それぞれ長屋王家の経済基盤の解明、平城京下の下級官人の実態や都と各地域との交流を析出さ

れている。吉村論文では、敦煌漢簡について、その出土遺構の状況、研究の現状と課題を論じられている。執筆者各位の御努力の御蔭で、第一三号とほぼ同じ分量の大冊とすることが出来た。改めてお礼を申し上げます。

第一四号については、編集担当委員となった私自身が公務やその他に追われて身動き出来ない状況にあり、また編集体制にも諸般の事情があつて、例年通りの編集日程では、大会に到底間に合わないことが当初から予想された。そのため原稿の締切りを一カ月早めたが、最終的には例年とそれほど変わらない状況に立ち至っている。それでも何とか大会に間に合いそうだ、との感触を得られるようになったのは、森公章氏を始めとする奈文研の方々や、委員・幹事諸氏の懸命な努力の賜物である。

昨年度の総会で、委員会から新規会員の入会を二年間凍結すると提案がなされ、了承された。その経緯や問題点については、八木充委員が本号の巻頭言で意を尽しておられる。木簡研究集会や木簡学会の発足当初から関わってきた者の一人として、私も編集体制の弱体化を痛感しているし、また全国の各遺跡から出土する木簡について、その積文の作成に複数の委員が何らかの形で関与していただけたら、との切なる思いをもつ。会員諸氏の英知を集め、木簡研究を志す若い研究者を輩出させる方策を、何とか残された一年間で考えたいものである。

(和田 萃)